

4 Currents

4.1 基本事項. X を可算開基を持つ連結 n 次元多様体とする. $0 \leq p \leq n$ に対して X 上の C^∞ 級 p 次微分形式の全体がつくるベクトル空間を $\mathcal{E}^p(X)$ で表わす. X の座標近傍 O_i, U_i を

$$X = \bigcup_{i=1}^{\infty} O_i = \bigcup_{i=1}^{\infty} U_i \quad O_i \supset \bar{U}_i : \text{コンパクト}$$

となるようにとる. $\omega \in \mathcal{E}^p(X)$ に対して

$$\omega = \sum_{j_1 < \dots < j_p} \omega_{j_1 \dots j_p} dx_{j_1} \wedge \dots \wedge dx_{j_p} \quad \text{on } O_i$$

$$|\omega|_i^a = \sum_{\substack{a_1 + \dots + a_n \leq a \\ j_1 < \dots < j_p}} \sup_{x \in \bar{U}_i} \left| \frac{\partial^{a_1 + \dots + a_n} \omega_{j_1 \dots j_p}(x)}{(\partial x_1)^{a_1} \dots (\partial x_n)^{a_n}} \right|$$

とおくと $|\cdot|_i^a$ は $\mathcal{E}^p(X)$ のセミノルムになり、 $|\cdot|_i^a$ を使うと命題 1.6 の方法によって $\mathcal{E}^p(X)$ は局所凸 Fréchet 空間になる。

$$d\omega = \sum_{j=1}^n \sum_{j_1 < \dots < j_p} \frac{\partial \omega_{j_1 \dots j_p}}{\partial x_j} dx_j \wedge dx_{j_1} \wedge \dots \wedge dx_{j_p} \quad \text{on } O_i$$

より $|d\omega|_i^a \leq |\omega|_i^{a+1}$ となるので

$$d : \mathcal{E}^p(X) \longrightarrow \mathcal{E}^{p+1}(X)$$

は連続。

$$0 \longrightarrow \mathcal{E}^0(X) \xrightarrow{d} \dots \xrightarrow{d} \mathcal{E}^n(X) \longrightarrow 0$$

を *de Rham complex* と呼ぶ。

4.2 定義. $\mathcal{E}^p(X)$ 上の連続線形形式を X 上の p 次元 *current* と呼び、その全体がつくるベクトル空間、つまり $\mathcal{E}^p(X)$ の双対空間を $\mathcal{E}'_p(X)$ で表わす。

4.3 注意. $T \in \mathcal{E}'_p(X)$ について T の台 $\text{spt } T$ は

$$\text{spt } T = X \sim \cup \{V : X \text{ の開集合} \mid \phi \in \mathcal{E}^p(X), \text{spt } \phi \subset V \Rightarrow T(\phi) = 0\}$$

で定義される. $\mathcal{E}'_p(X)$ の元はコンパクトな台を持つことがわかる. 一般には $\mathcal{E}'_p(X)$ の元をコンパクトな台を持つ *current* と呼ぶが、ここでは単に *current* と呼ぶことにする。

4.4 定義. $T \in \mathcal{E}'_p(X)$ に対して $\partial T = T \circ d$ とすると $\partial T \in \mathcal{E}'_{p-1}(X)$ となり、線形写像 $\partial : \mathcal{E}'_p(X) \longrightarrow \mathcal{E}'_{p-1}(X)$ が定まる. ∂ を境界作用素と呼ぶ。

4.5 注意. $d^2 = 0$ より $\partial^2 = 0$ となり

$$0 \longleftarrow \mathcal{E}'_0(X) \xleftarrow{\partial} \cdots \xleftarrow{\partial} \mathcal{E}'_n(X) \longleftarrow 0$$

も *complex* になる。de Rham の定理より

$$H_*(\mathcal{E}'_*(X)) \cong H_*(X; \mathbb{R}).$$

4.6 基本事項. X 上の連続 p 次微分形式の全体がつくるベクトル空間を $\mathcal{C}^p(X)$ で表わす。 $\omega \in \mathcal{C}^p(X)$ に対して

$$\begin{aligned} \omega &= \sum_{j_1 < \cdots < j_p} \omega_{j_1 \cdots j_p} dx_{j_1} \wedge \cdots \wedge dx_{j_p} \quad \text{on } O_i \\ |\omega|_i &= \sum_{j_1 < \cdots < j_p} \sup_{x \in \bar{U}_i} |\omega_{j_1 \cdots j_p}(x)| \end{aligned}$$

とおくと $|\cdot|_i$ は $\mathcal{C}^p(X)$ のセミノルムになり、 $|\cdot|_i$ を使うと命題 1.6 の方法によって $\mathcal{C}^p(X)$ は局所凸 Fréchet 空間になる。 $\omega \in \mathcal{E}^p(X)$ に対して $|\omega|_i = |\omega|_i^0 \leq |\omega|_i^a$ が成り立つので包含写像 $\iota: \mathcal{E}^p(X) \rightarrow \mathcal{C}^p(X)$ は連続。

4.7 定義. $\mathcal{C}^p(X)$ 上の連続線形形式を X 上の積分表示可能な p 次元 *current* と呼び、その全体がつくるベクトル空間を $\mathfrak{m}_p(X)$ で表わす。包含写像 $\iota: \mathcal{E}^p(X) \rightarrow \mathcal{C}^p(X)$ は連続だから $T \in \mathfrak{m}_p(X)$ に対して $T \circ \iota \in \mathcal{E}'_p(X)$ 。また $\mathcal{E}^p(X)$ は $\mathcal{C}^p(X)$ 内で稠密なので線形写像

$$\mathfrak{m}_p(X) \longrightarrow \mathcal{E}'_p(X); T \longmapsto T \circ \iota$$

は単射になる。したがって $\mathfrak{m}_p(X) \subset \mathcal{E}'_p(X)$ とみなすことができる。

4.8 定義. X に Riemann 計量を 1 つ入れ固定しておく。各 $x \in X$ において $\wedge^p T_x^* X$ での *comass* を $\|\cdot\|^*$ で表す。 $T \in \mathcal{E}'_p(X)$ に対して

$$\mathbb{M}(T) = \sup\{T(\phi) \mid \phi \in \mathcal{E}^p(X), \|\phi_x\|^* \leq 1 (x \in X)\}$$

とおく。 $\mathbb{M}(T)$ を T の *mass* と呼ぶ。各 $T \in \mathcal{E}'_p(X)$ に対して $\mathbb{M}(T) \in [0, \infty]$ 。

4.9 補題. 1 の分割 $\{h_i\}$ を $\text{spt } h_i \subset U_i$ となるようにとる。 $T \in \mathcal{E}'_p(X)$ に対してある k が存在し

$$T(\phi) = \sum_{i=1}^k T(h_i \phi) \quad \text{for } \forall \phi \in \mathcal{E}^p(X).$$

証明. $T \in \mathcal{E}'_p(X)$ の台 $\text{spt } T$ はコンパクトであることに注意しておく。

$$A_k = \left\{ x \in X \mid \sum_{i=1}^k h_i(x) = 1 \right\}^\circ$$

とおくと、 $\{A_k\}$ は X の開被覆になる。したがってある k が存在し $\text{spt } T \subset A_k$ が成り立つ。任意の $\phi \in \mathcal{E}^p(X)$ に対して $\psi = \sum_{i=1}^k h_i \phi - \phi$ は A_k 上で 0 になるので $X \sim \text{spt } T \supset X \sim A_k \supset \text{spt } \psi$ 。よって $T(\psi) = 0$ 。これより $T(\phi) = \sum_{i=1}^k T(h_i \phi)$ が成り立つ。

4.10 命題. $T \in m_p(X)$ とすると $f \in C^0(X)^+$ に対して

$$\sup\{T(\phi) \mid \phi \in \mathcal{E}^p(X), \|\phi\|^* \leq f\} < \infty.$$

証明. T に対して補題 4.9 のように 1 の分割 $\{h_i\}$ と k をとっておく。 $\phi \in \mathcal{E}^p(X), \|\phi\|^* \leq f$ とする。

$$\begin{aligned} |T(\phi)| &\leq \sum_{i=1}^k |T(h_i\phi)| \leq \sum_{i=1}^k A_i |h_i\phi|_i \quad (T \in m_p(X) \text{ だから}) \\ &\leq \sum_{i=1}^k B_i \sup_{\bar{U}_i} \|h_i\phi\|^* \leq \sum_{i=1}^k B_i \sup_{\bar{U}_i} \|\phi\|^* \leq \sum_{i=1}^k B_i \sup_{\bar{U}_i} f < \infty. \end{aligned}$$

4.11 命題.

$$m_p(X) = \{T \in \mathcal{E}'_p(X) \mid \mathbb{M}(T) < \infty\}$$

証明. $T \in m_p(X)$ に対して命題 4.10 を $f = 1$ として適用すると $\mathbb{M}(T) < \infty$ がわかる。逆に $T \in \mathcal{E}'_p(X)$ が $\mathbb{M}(T) < \infty$ を満たすとする。 T に対して補題 4.9 のように 1 の分割 $\{h_i\}$ と k をとっておく。 $\phi \in \mathcal{E}^p(X), \|\phi\|^* \leq 1$ に対して $\|h_i\phi\|^* \leq 1$ だから、

$$|T(h_i\phi)| \leq \mathbb{M}(T)$$

よって任意の $\phi \in \mathcal{E}^p(X)$ に対しては

$$|T(h_i\phi)| \leq \mathbb{M}(T) \sup_{\bar{U}_i} \|h_i\phi\|^* \leq \mathbb{M}(T) C_i |h_i\phi|_i$$

となり

$$|T(\phi)| = \left| \sum_{i=1}^k T(h_i\phi) \right| \leq \sum_{i=1}^k |T(h_i\phi)| \leq \sum_{i=1}^k \mathbb{M}(T) C_i |h_i\phi|_i.$$

この評価より $T : \mathcal{E}^p(X) \rightarrow \mathbb{R}$ は $C^p(X) (\supset \mathcal{E}^p(X))$ の相対位相に関しても連続。したがって定理 1.11' (Hahn-Banach) より T の連続な拡張 $\bar{T} : C^p(X) \rightarrow \mathbb{R}$ が存在する。 $m_p(X) \subset \mathcal{E}'_p(X)$ とみなしているので $\bar{T} = T$ となり $T \in m_p(X)$ である。

4.12 定理. $T \in m_p(X)$ に対して X 上の測度 $\|T\|$ が存在し X 上の実数値連続関数はすべて $\|T\|$ 可測になり

$$\int_X f d\|T\| = \sup\{T(\phi) \mid \phi \in \mathcal{E}^p(X), \|\phi\|^* \leq f\} \quad \text{for } \forall f \in C^0(X)^+$$

が成り立つ。特に $\int_X d\|T\| = \mathbb{M}(T)$ 。

証明. $f \in C^0(X)^+$ に対して、

$$\lambda(f) = \sup\{T(\phi) \mid \phi \in \mathcal{E}^p(X), \|\phi\|^* \leq f\}$$

とする。命題 4.10 より $\lambda(f) < \infty$ が成り立つ。任意の $f \in \mathcal{C}^0(X)$ に対しては $f^+ = \max\{f, 0\}$, $f^- = -\min\{f, 0\}$ とおくと $f = f^+ - f^-$ となり

$$\lambda(f) = \lambda(f^+) - \lambda(f^-)$$

として

$$\lambda : \mathcal{C}^0(X) \longrightarrow \mathbb{R}; \text{線形写像}$$

に拡張できる。 $f \in \mathcal{K}(X)^+$ に対して $0 \leq \lambda(f)$ だから、定理 2.6(Riesz の表現定理) より X 上の測度 $\|T\|$ が存在し X 上の実数値連続関数はすべて $\|T\|$ 可測になり

$$\int_X f d\|T\| = \lambda(f) \quad \text{for } \forall f \in \mathcal{K}(X).$$

T の台はコンパクトだから

$$\int_X f d\|T\| = \lambda(f) \quad \text{for } \forall f \in \mathcal{C}^0(X).$$

特に

$$\int_X d\|T\| = \lambda(1) = \mathbb{M}(T).$$

4.13 定義. $\|T\|$ を T の全変分測度と呼ぶ。

4.14 定理. $T \in \mathfrak{m}_p(X)$ に対してベクトル束 $\wedge^p T X$ の $\|T\|$ 可測な断面 \vec{T} が一意に存在し

$$\begin{aligned} \int_X \|\vec{T}_x\| d\|T\| x < \infty, \quad \|\vec{T}_x\| = 1 \quad \text{for } \|T\| \text{ a.a. } x \in X \\ T(\phi) = \int_X \phi(\vec{T}_x) d\|T\| x \quad \text{for } \forall \phi \in \mathcal{C}^p(X) \end{aligned}$$

を満たす。ここで $\|\vec{T}_x\|$ の $\|\cdot\|$ は $\wedge^p T_x X$ 上の *mass* である。

証明. T に対して補題 4.9 のように 1 の分割 $\{h_i\}$ と k をとっておく。まず O_i を 1 つ固定して考える。 e_1, \dots, e_n を O_i 上の正規直交ベクトル場とする。

$$\begin{aligned} \wedge^p T^* X|_{O_i} &\longleftrightarrow O_i \times \wedge^p(\mathbb{R}^n)^* \\ \sum_{j_1 < \dots < j_p} a_{j_1 \dots j_p} e_{j_1}^* \wedge \dots \wedge e_{j_p}^* &\longleftrightarrow (x, a_{j_1 \dots j_p}) \end{aligned}$$

によって $\wedge^p T^* X|_{O_i}$ を $O_i \times \wedge^p(\mathbb{R}^n)^*$ と同一視して考える。すると $\phi \in \mathcal{K}(U_i, \wedge^p(\mathbb{R}^n)^*)$ に対して $\phi \in \mathcal{C}^p(X)$ とみなすことができ

$$T_i(\phi) = T(\phi) \quad (\phi \in \mathcal{K}(U_i, \wedge^p(\mathbb{R}^n)^*))$$

として $T_i : \mathcal{K}(U_i, \wedge^p(\mathbb{R}^n)^*) \longrightarrow \mathbb{R}$ を定める。 $T \in \mathfrak{m}_p(X)$ だから $\wedge^p(\mathbb{R}^n)^*$ の comass から定まる $\mathcal{K}(U_i, \wedge^p(\mathbb{R}^n)^*)$ のノルムに関して T_i は連続である。したがって定理 2.7 より U_i 上の測度 μ_i と U_i から $\wedge^p \mathbb{R}^n$ への μ_i 可測写像 \vec{T}_i が存在し

$$\begin{aligned} \int_{U_i} \|\vec{T}_i\| d\mu_i < \infty, \quad \|(\vec{T}_i)_x\| = 1 \quad \text{for } \mu_i \text{ a.a. } x \in U_i \\ T_i(\phi) = T(\phi) = \int_{U_i} \phi(\vec{T}_i) d\mu_i \quad \text{for } \forall \phi \in \mathcal{K}(U_i, \wedge^p(\mathbb{R}^n)^*). \end{aligned}$$

$k < i$ のとき $\vec{T}_i = 0$ となることに注意しておく。また $\|T\|$ と μ_i の定めより

$$\|T\| = \sum_{i=1}^k h_i \mu_i$$

となっている。 \vec{T}_i を $\wedge^p TX|_{U_i} \cong U_i \times \wedge^p \mathbb{R}^n$ の $\|T\|$ 可測な断面とみなすと、 $U_i \cap U_j \neq \emptyset$ となる i, j について $(\vec{T}_i)_x = (\vec{T}_j)_x$ が $\|T\|$ に関してほとんどすべての $x \in U_i \cap U_j$ に対して成り立つ。そこで

$$\vec{T}_x = (\vec{T}_i)_x \quad (x \in U_i)$$

として $\wedge^p TX$ の $\|T\|$ 可測な断面 \vec{T} を定めることができる。定め方より $\|T\|$ に関してほとんどすべての $x \in X$ について $\|\vec{T}_x\| = 1$ となる。また

$$\int_X \|\vec{T}\| d\|T\| = \sum_{i=1}^k \int_{U_i} \|\vec{T}_i\| h_i d\mu_i < \infty.$$

さらに補題 4.9 を使うと $\phi \in \mathcal{C}^p(X)$ に対して

$$\begin{aligned} T(\phi) &= \sum_{i=1}^k T(h_i \phi) = \sum_{i=1}^k T_i(h_i \phi) \\ &= \sum_{i=1}^k \int_{U_i} h_i \phi(\vec{T}_i) d\mu_i = \sum_{i=1}^k \int_{U_i} \phi(\vec{T}) h_i d\mu_i \\ &= \int_X \phi(\vec{T}) d\|T\|. \end{aligned}$$

4.15 注意. 以下では $T \in \mathfrak{m}_p(X)$ に対して

$$T(\phi) = \int_X \phi(\vec{T}_x) d\|T\|_x \quad \text{for } \forall \phi \in \mathcal{C}^p(X)$$

を単に $T = \vec{T}\|T\|$ と書くこともある。